

くすりとリスク

随分前に、私は医者から処方された薬を服用した直後、気分が悪くなってきたことがあります。

認可されている薬であってもくすりがりリスクとなることがあります。南が丘小学校の職員室の全面の壁に昔から「その一言が人を傷つけ、その一言がひとを励まし、その一言が…」と毛筆で書かれた掲示物が貼られています。いつ、誰が書いたのか不明ですが、これを書かれた

方は「教室でも職員室でも、あるいは家に帰ってもこのことを忘れてはいけないよ」ということを伝えたかったのではないかと思います。“ことばはくすりにもなるがリスクにもなる”とは医師の稲葉俊郎さんの言葉です。まさにこの掲示してあった内容は稲葉さんの言っていることと同じです。

以前、私の隣のクラスを担当していた同僚が「クラスの子どもたちがだんだん自分と同じ口調になってきたんさな」と言っていたことを思い出します。このようなことは他にも何人もの同僚から聞いたことがあります。私も我が子が自分と同じ言葉を使っているハッとさせられたことがありました。子どもたちは親や教師が使う言葉をよい言葉、傷つける言葉、馬鹿にする言葉も無意識のうちにすべて心に刻み込んでいき、やがて使うようになります。以前、ある学校で1年生の子が別の子に対して「あなたは何度言ったらわかるの。ちゃんとしなさい。」と言っているのを聞いてドキッとしたことがあります。「〇〇ちゃん、すごいわね。よく頑張っているね。」「～してくれて助かったよ。」などプラスの言葉(ストロークとも言います)に多く触れている子どもは一般的に他の友だちに対しても穏やかにそしてポジティブに関わることができると言われています。私たちは教師であること以前に大人として「その一言が人を…」を心に刻み、自分がどんな言葉を使っているかあらためて見直していかなければならないと思います。

子どもの言葉に心が癒されます

毎朝、登校を見守っている私に葉っぱを黙って渡してくれる子のことは以前にも紹介しました。毎朝、同じ葉っぱですが、ある日、違う葉っぱを出しながら「今日はよもぎ」と伝えてくれました。また、大雨の日の翌日の晴れた朝には「今日は晴れてよかったね」と声をかけてくれました。この子は心で感じたことを素直に言ってくれたのでしょう。この感性のすばらしさに私の心が癒されました。

普段、校長室で仕事をしていると、運動場側の窓から、いろいろな学年の子が「こうちょうせんせ〜い」と叫んでくれたり、手を振ってくれたりします。700人近くいる津市内でも大規模な学校で子どもから見ると、ともすれば校長という存在は遠く感じてしまいやすいと思います。しかし、私は校長であっても子どもたちが気楽に声をかけ、話ができる存在でありたいと思います。時には真後ろから声をかけられ、びっくりすることもありますがこの関係を大切にしていきたいと思います。夕方、後ろから「あ、ジャガリコや〜」と机上的お菓子が見つかってしまいました。背後から見られていることを忘れてはいけないと反省しました。

